演劇脚本

下紅葉朝日照映

全六幕

勝諺藏著作

164
218

088583-000-0

特52-606

下紅葉朝日照映

勝　諺藏／著

M27

DBJ-0242

演劇脚本 下紅葉朝日照映 六幕

場割

序幕 ｛東寺山門前の場
同裏道見染の場

二幕目 ｛高利貸八兵衛内の場
賤屋お常住居之場

三幕目 伏見大亀谷八兵衛殺しの場

四幕目 ｛深草里死焼梅五郎内の場
同土死場平田五兵衛捕物の場

五幕目 金貸増田文三兵衛内の場

大詰 伏見戦争之場

序幕

役人替名

一浪士平田五郎
一目明かし勝藏
一梨畑番人八兵衛
一百姓文三郎
一梅五郎妹お民
一娘　お近
一植木屋松兵衛
一牛田の僕彌五平
一楊枝商人竹藏
一糞寶屋勘七
一娘　おつね
一瓦焼梅五郎
一浪士岩崎虎雄
一同　荒浪龍三
一同　金子鉄彌
一同　雨の宮雷八
一商人吉兵衛
一參詣人仕出し惣出

東寺山門前の塲

本舞臺平舞臺正面東寺の山門上下筋塀此前の方糞寶屋の仕出し都而東寺山門大師緣日乃摸様上手に勘七客を呼んで居る松兵衛植木に水を掛け竹藏出し店に腰を掛居る惣出の仕出米袋を提げ山門と橋掛りより行違出で來り此摸様流行唄大師堂勤めの鳴物にて幕明く

(仕出皆々)南無大師遍照金剛」 勘七「マアお懸け」〔ト仕出し廻つて出來る能き程に八兵衛向ふより出來るをお民呼乍ら出來り〕民「梨畑の伯父さん」八「ヲヽお民さん」民「伯父さん兄さんに逢わなんだかへ」八「イヤ見掛なんだぞ」民「私しや兄さんにはぐれて」八「それは困ッた事じやがあの山門前で見張つて居たら逢ふで有ふ」民「それもそふでムんすなァ」〔ト舞臺へ來る〕勘「まァお掛けなされ升せ」八、民「御免ト床几へ腰を懸ける」松「竹藏さん暫らく店を頼み升一寸れ辨をやつて來るから」竹「宜しい用が有つたら直ぐに呼ぶからゆつくりと」〔ト松兵衛糞寶店へ來る〕八「ヲヽ松さんの」松「イヤ八兵衛さんか其の向ふのは梅さんの妹お民さんか」民「松さんお前へ兄さんを見なんだのへ」 松「イヤ梅さんも見掛んぞ」民「其れでは伯父さん私しは先き參り升わいなァ」松、八「マア能ではないか」〔トお民山門ノ方へ這入橋懸りより吉兵衛出で來る〕吉「ヲヽ松さんお前を尋ねて居たのじや」松「ヲヽお前さんも吉兵衛さんして私に用事とは」吉「外でもない此間五両で買ふた万年靑を賣ふと思ふのだがお前が買ふあり人に世話せふなり一ッ骨折つて見てハ呉まいか」 松「すりや又何ふ言ふ譯けで」 吉「余り錢に困るから三両位に賣れゝば二両丈けハ損を仕ても仕方がないから」松「それは私も買て置たいなれど丁度今は錢が無いので〇ヲヽ八兵衛さんお前買ふて置いても何ふじや誠に安いもんだ」八「ろんなものハれが買ふても仕方がない」松「スリヤ八兵衛さんお前にや明かるま

いが此頃万年青で錢儲けする者は多い事じやモシ此万年青に少し變わつた葉でも出來たら百や二百の錢は儲ふかると言ふもの又買ふて置いて二両や三両に成らば何時でも私しが賣つて上げる程にまア八兵衛さん惡るい事は言れん買ふて置きなさい」八「お前へその樣に言ふから買いも仕樣がもそつと負けて貰らつて弐両でなら買ふて置ふが」松「それじや八兵衛さん買ふて呉れるか○處で吉兵衛さんどふです弐両では少し氣の毒だが」吉「弐両では誠に捨てる樣なものなれど私しも錢に困まる故へ仕方がない安いけど其れで賣ると仕樣」八「そんなら買ふて置き升ふト錢入れより壹両札弐枚出し」八「それじや松さん是れを吉兵衛さんとやらへ」松「それでは吉さん慥に渡し升」吉「有難ふムり升たト吉兵衛金を受取る此時橋懸より岩崎荒波金子雨の宮浪士の拵らへにて出で來り八兵衛が金を仕舞掛るを見て皆咡く」

八「それでは私しは大師さんへお參りを仕て來ふ然し松さん此万年青を人込みの中持つて行くも剱のん故お前に預けて置くと仕樣」松「それでれ翌た私しが持つて行き升ふわいナ」

八「どふぞ金に成る樣ナ葉が出來て呉れば能いがナ」松「又慾の深い事をいつて居るせ」吉「よく買ふておくんなさい升た「ト八兵衛山門の内へ這入る浪士四人跡に附て這入る」吉「松さんゑらいお世話に成り升た一寸隣で一杯お禮の變りに濟まんけれども附合ふておくんなさい」松「何の其禮に及ぶものかお前さんも安賣りして」吉「マアそふ言はずと松さん」松「それでは御遠慮なしに」吉「サアお出で成さい「ト両人羨賣店へ這入ると向ふより兼松吉松と二人連れにて出來舞臺へ來ると此時門の内よりお市來り」兼「コレ吉マア此床几で少し休んで行としよう」吉「兄さんけふはエライお參りじやナア」市「兄さん是れをお梅さんから」兼「オヽ悧くりした誰れだお市さんか「トお市より手紙を受取る」兼「お市さん御苦勞「ト思入れあつて吉坊お前先きへ參つて待つて居て呉れ」吉「それではいつもの處で待つて居り升」兼「どふぞそふしてお呉れ「ト吉松門の内へ這入るお市下手へ這る」兼「そふしてお梅さんは」

梅「ハイ爰に居升たわいナア「ト門の内より出で來る」兼「オヽお梅さん今の手紙の樣子では親人がお前を妾けさんにするとの事」梅「サ私しもお前と一旦斯ふと言かわした中成れば別れる氣はないわいなア」兼「此樣な詰らん男でも」梅「何の變つてなり升ぞいナア」兼「お前がそんな心なら私しも一生見捨ては仕升ぬまア何は兎も有れ大師さまへ」梅「其れでは一ツ所に參り升ふ「ト二人りは門の内へ這入ると向ふより梅五郎跡より文三郎出來り」梅「それではなんぞ急な用事でも有て來のか」文「實は少し御相談が有て」梅「それでは向ふの床几でゆつくり」文「そふ致し升ふ「ト舞臺へ來り床几へ懸け」梅「そうして私しゑ相談とは」文「外の事でもムり升せぬ私し程此世の中に因果ナ者はムり升まい○ト相方に成りお前が常の談しには私しが實の親といふは中國の侍でお藏屋敷に居た頃に母者人を世話して中に出來たが私

しじやろふなまだ腹に居る內親父樣は國へ歸り母者人は產後の苦痛でなくなられ孤子と成
つた私しを慈悲深ひお前の親仁さんが引取て五ツの年に宇治へ貰られ其養父母も先途の
流行病で枕並らべて長の病氣に少々の田地も賣拂藥やら何やかやと及ぶ丈けの介抱して仕た
甲斐も泣〳〵養父母にも死に別れあとの始末はお前が來て片付て下さつた故へ一旦納りは
附たれど納り附かぬは諸方の借金日々の催促に參り責められる故いつそ宇治川へ身投死の
ふと覺悟は仕た成れど是れ迄長の世話に成つたお前に斷りなしに死んでもとその相談に來
升たのじや」梅「アハヽヽ子供の樣ナ事を言ふない死ぬる相談掛けられ成程ろれして能い分別
と言ふやつが有る者か增して貴樣ハ侍の胤強かり膽を坐へて居ろ嘸困るでも有ふなれど其
の樣に思ふ事ならおれの內へ來るが好い」文「ろれでハお前に迷惑を」梅「ヘチ仮染にも兄弟分
の間柄何ろ心配が入るものかい」文「何んにも言い升せん兄さん有難ふムり升〳〵〔ト涙を拭
ひ手を合して言ふ此時山門の內よりお近出來り梅五郎を見て」近「チヽ兄さん今お大師堂で
れ民さんが探がして居なさんしたぞへ」梅「チヽれ近さんかそれでは妹が尋ねて居ろふろこ
でお近さんお前に賴みが有る何卒此男を私しの內迄送り屆てお呉れでないか」近「おヽあん
たハ文三郎さんとやら言ふお方をたしが急度お送り申升ふわいなァ」梅「ろれでは近さん賴
み升たぞ」文「それでは兄さん」梅「文三郎」近「早ふ往て上げて下さんせ」梅「どれ妹を尋てや

ろふか〔トそやり唄動の鐘に成り梅五郎山門の內へ這入る〕近「ろれではあなた御一所に參り
升ふわいなァ〔ト言乍手を取る文三郎振り拂ひ〕文「何を被成升る」近「デモ梅五郎さんから
賴まれたあんたゆへ途中で麁相のないやふに私しが斯うして手を引て〔ト又手を取るを〕
文「なんのそれには○　ト手を振放すのが道具替りの知らせ」　文「及よび升せぬわい〔トお
近もどかしき体此摸樣よろしく流行唄動の鐘にて

返　し

本舞臺半舞臺上手出茶屋下手床几一脚置き都て東寺野中の体爰ニ岩崎虎雄荒浪龍三金子鉄
彌雨の宮雷八八兵衛を中に取圍み居る此摸樣半廻り在鄕唄にて道具納る
〔ト向より八兵衛出で來る跡より岩崎荒浪金子雨の宮八兵衛の跡を附けて來る八兵衛氣味
惡き体にて上手へ逃げ込むを浪士追欠け來り〕虎「コリヤ八兵衛」四人「一寸待」八「ヘイ〳〵
お呼被成たはお前樣方でムり升たか」龍「ろふサ呼止めたは外でもナイ」鉄「其方所持成す其
金子」雷「渡して貰ら合ふ〔ト八兵衛の懐へ手を入れ財布引き出を悔して紐を握り〕八「モシ
滅相な事被成升な隨分此金は汗水流がして殘たお金其を不見不知のお前樣方に渡て成もの
か」鉄「ヤア我々が目ヱ懸た上て」龍「如何に許し置可や」雷「きり〳〵金を」虎「渡て仕舞へ〔
ト詫らへの鳴物に成り金子を取ふとそる八兵衛龍文身の片肌ぬき武者振り付く〕八「誰ぞ來
て呉れ盗人じや〳〵〔トわめく是をばた〳〵に成り向ふより平田五郎出來り龍三が持し財

布を引取つて八兵衛に投げ返し遣り四人をさゝへて急度留め」五「コリヤ各々方には老人を捕
らへ何と被成ぞ渴しても盗泉の水を呑まぬこそ武士の本意トサ不見不知の平田五郎斯く御意
見签敷申上るも同志の名義を思へばこそ以后斯樣な行ひ愼み有なれば此場の始末は是限に
取計い申さん御意存あらば承りたし〔ト和かに言ふ四人顏見合し〕虎「是は〳〵御深切の其
お論」關「面目次第もムり升ぬ」鉄「何卒此場の有樣は」雨「御許容被下ば」虎「以后こそ必」四人「
愼むでムり升る」五「能くぞ仰被下た先非を悔ゐ只今のお詞不肖満腸に存ず此場の始末互に
知て知ぬ顏」四人「スリヤ我々をお見のがし被下トナ」虎「其お許しに預上は」五「是れにてお
別れ」五人「申でムり升せふ〔ト浪士四人上手へ這入五郎跡を見送り思入有て〕五「コリヤ老
人何處も怪我は無つたか」八「ハイ有り難ふムり升るお影樣で金も取られ升ず何と御禮の申樣
もムり升ぬ」五「ソれでは老人今の内に早く歸るが善からふぞ」八「ハイ〳〵ソれでは御免を蒙
り升る〔ト在鄕唄に成り向ふへ這入る茶店よりお常出來り」五「定めて彌五平も待て居らん〔
ト行懸るを〕常「アヽモシお侍樣暫らくお待被下升せ」五「終いに見知らぬ婦人何ぞ拙者に」
常「少々お願がムり升て」五「願とハ」常「敵討の助太刀がお願申度ふムり升る」五「ヱヽ何と申
〔ト合方に成り〕常「私事は田中定之進と申す者の娘でムり升るが父存生の頃は京都富の小
路にて随分立派に暮らして居り升たが忘れも致し升ぬ一昨年十月三日夜五條小橋の西詰で
何者の仕業にや非業の御最期」五「ヤ」常「それから敵討たいと思へど女の身の不甲斐なサ何
ふかして武術に達せしお方樣に助太刀お願申何卒敵を討たいと忘るゝ暇もムり升ぬ不見不
知の御武家樣へお願い申も斯樣ナ次第何卒御聞屆なされて下さり升せ」五「女の身にて遖れ
成る其精神去乍爰の處を能く聞かれよ今洛中に浪士蔓り所々に無慘の横死有る當時相手を
糺し恨み返すハ容易不成故ヱ敵討の義は斷念なし跡念頃に吊ふが却て亡父へ孝と言ふもの
何と左樣ではムらぬか〔トお常得心の思入れ有て〕常「成程御前樣の仰の通り其道理をも辨
まへず今日迄敵討たい〳〵と思い詰めたる心の迷も只今合点が參り升た」五「スリヤ身共が
論に依て」常「ふつゝり思い止まり升た」五「ソれこそ能くぞ合点が參つた」常「其おやさしいお
詞に一入思が」五「エ」常「イヱ思い懸けない事よりして」五「是れも何ぞの緣で有ふか」常「其御
緣を御思召ば何卒此後折々は」五「尋て參て不及乍お世話申で有ふ〔ト此時彌五平出來り〕彌「
チヽ旦那樣靈山の晩亭にて皆樣が御會合との事成れば」五「歸れと申て迎に參つたかソれで
は歸ると致そふか」常「もふお歸りでムり升るか〔ト五郎お常の顏を見てよい女といふ思入
有て氣をかへ〕五「先今日こそ此儘に」常「れ別れ惜敷ムり升る」五「ア見る程」彌「エ」五「サア參
るで有ふ〔ト両人向ふへ這入る橋懸りよりお民五郎を見送り乍ら出來り〕民「今京に多く集
まる御浪人の其内よりも」常「又と有まい」民「お姿のお美しさ」常「とても女子と産れたなら」

民「露の一夜の」両人「お情け成りと〔ト此時上手より勝造橋懸りより梅五郎出で來両人を見て〕勝「ヲヽ其處に居るのはお常さん」梅「妹お民爰に居たか〔ト言へ共両人五郎に見とれ心の附かぬ体〕勝「是れはしたり何を見て」梅「ぼんやりとして居るのだ」両人是サ〔ト両人の脊中を叩く是にて悔りして心づき〕民「お前は兄さん」常「勝造さん〔トはつと思入が木の頭〕両人「悔りしたわいなァ〔ト勝造梅五郎合点のゆかぬ体此摸様宜敷在郷唄流行動の鐘の音にて拍子幕

弐幕目

役人替名

一 浪士平田五郎	一 目明シ勝藏
一 高利貸八兵衛	一 百姓文三郎
一 植木家松兵衛	一 雇婆ァお徳
一 髮娘お常	一 死焼梅五郎
	一 與力一人
	一 捕手四人

高利貸八兵衛内の場

本舞臺二重上手障子家体例の處門ト口都て伏見桃山八兵衛内の体爰に植木家松兵衛雇人お徳話を成し居る稽古唄にて幕明く

松「今日ハ御主人八兵衛さんは留守かな」徳「イヤ御内じやが何がさて今日は御隱子の入らつしやるので大低多用な事じやないわいナァ」松「左様かなイヤ此八兵衛さんも元は梨木畑の番人であつたが私しが弐両に賣つた万年青が八百圓に賣れ夫で一時に仕上げた身代其禮として私にも百両呉れ今では何千両と言大金持人間の運と言者はとんと分らぬ者じやなァ」徳「エヽろんな事聞て居る間がない故早歸つて下され」松「エヽ今去ぬ處じや〔ト松兵衛の去らんとするを呼び止め乍ら主人八兵衛出で來りお徳を去らしめ改めて松兵衛に向い偖と」八兵衛「松兵衛宜イ万年青があるかな儲かる品なら何時でも買ますぞへ」松「あの様に儲かる品ハ左様度々ょ有る物か」八「シテ今日の品ゝ何程じや」松「此品ゝ今の相場で壹両弐分じやが來年芽の出る時は五十両にゝ飛んで賣れる品じや〔ト種々すゝむるに任せ万年青を買取り松兵衛を返らし〕八「弐両の万年青が八百両に賣れた味が忘れられず夫から万年青を賣買して隨分小金も儲けたが何分夫でハ儲が薄く夫から日歩も貸して居るがァヽ金儲けに愚ゝない者じやなァト獨言言居る處へ死焼梅五郎先に文三郎出て來り」梅「お前の今度親仁さんに成る人は元と梨畑の番人をして居なさつたを万年青を買て身代仕上げ今では何千両と

云大金持其家の養子に成る体故成る丈ケ正直にせねば成らぬと此筋の捨臺詞にて本舞臺へ來り門ト口にて」梅「八兵衛さん内か」八「チヽ梅五郎さんサヽ此方へ〳〵と招じ入れる梅五郎文三郎を伴ひ内に入り一順の挨拶畢て」梅「偖て八兵衛さん何分正直な斗りで人の機嫌も取れまいからそこは宜敷」八「夫が此方の望む處私しも取る年故面倒かろうが見て下され」文「誠に至らぬ者でムり升る故何分共に」松「幾久う」八「チヽまア目出度「ト御徳出て來り御養子のお越しとあれば一寸一ト口御酒盛をト云ふを」八「何云ぞい酒も嫌らいじや又酒を呑めば夫丈ケ此費の立つ事チヽ養子にも仲人さんにも御祝儀じや茶漬喰て下され「ト八兵衛は節倹の臺詞ある折柄時のかね鳴八兵衛立ち上つて」八「梅五郎まア御ゆつくり被成私しは勝藏の所へ約束の金の催促一ト走り往て來る程にコレ文三郎殿内を氣を附て下され」總「チヤ御養子のお出成すつて未だ御挨拶のすむや濟まぬに催促にた出とは」松「イヤト留るが木頭」梅「兎角家業は第一だ「ト梅、八両人顔見合せアヽ……ト……宜敷返し

本舞臺平舞臺上手折廻りの障子家体例の處に門ト口下手露路口都て髮娘お常住居の体爰に前幕の髮娘お常髮を置き頭五分がりまて化粧をして居る此体端唄にて道具納るト」

常「元ト私しが九條新地で藝者をして居た時分通ひ詰たる米さんに身受をされて女房に成つても浮氣はやめられず前々から好き合あの目明しの勝藏さんを引入れたを見附られてとふ〳〵此様にぐる〳〵坊主此夏のあつい日に髮を着ねば成らぬとはアヽ厄介な頭じやあア「ト是を端唄に成り勝藏出で來り」勝「お常さんお内ですか」常「ハイ何様でムり升る」勝「おらつちだ」常「エヽ好かない主だね」勝「好かなきやア歸ろう」常「アレまアお這入な「ト内へ引入る」勝「レコハ來やア仕ねへか」常「サア今日は來やア仕ねへがねコンナ頭にされるほどお前が可愛私の因果米さん所を出てからも二人一所に居る時は甘イ事も出來まいと別れて居る其内に爰の旦那の平田五郎を甘くだまして仇キ討とふれこんで勤王黨の娘だと彼奴よ一杯喰らわしてこふして家まで借つて貰らい内々お前を引入れて樂しんで居るとは余程運がむいて來たね「ト両人種々語らい居る此以前より八兵衛出て來り立聞して居る」勝「そうじてお常此頃に金が十両入用だかどふか工面は附まいか」常「度々無心で借り出して居るから平田もそふは行くまいに」勝「コウ〳〵錢のねへ平田に引附て居る手前は玉は返つたナ」常「置てお呉よ何ぼ何んでも嫌だよそんナ事云ては」勝「それじや工面してくれねへか今夜金借の八兵衛め矢の附く様に言てくるから大困りで居る所だ「ト お常思あんして」常「チヽ宜事がある旦那の常の噺にはおれの宿の鎧櫃の底には金が額で弐百両張り附けてあると云たから夫さへ此方へ巻き上げる工風はおまへ出來ねへかへ」勝「そいつはありがてへ夫さへ聞けば大丈夫コウお常コウ云工面にするがいゝおれは是から役所へ行コウ〳〵ダと訴人そる

から手前平田に酒を呑し充分酔わして仕舞つたら夫を召捕るとさくさ紛れ弐百両を引つさらへる分の事」常「成る程勤王黨の浪人を探しあるくお前の商賣そりや能所へ氣が附たねへ〔ト此時八兵衛〕八「ハイ御めん被成」常「エどなたさまでム り升る」八「あゝたに勝藏さんはおり升るか」勝「勝藏さまはおれだがどいつだ」八「私じや八兵衛じやと這入る」勝「ヤおまへハ八兵衛さんコリヤ大變だ〔ト是より八兵衛催促するお常留る種々臺詞あつてドゥ金が出來ぬと云ゟ八兵衛は大に怒り」八「金を返さずばコレから勝藏を引張て出る所まで出る積じやサア來い」勝「エヽ勝手にさらせ」八「せいてかいやい〔ト勝藏よつかみ掛る是より立廻りと成る所へ花道より平田五郎出で來り」平「歸刻を期せぬ旅立故ドレお常に烏渡逢て參ろう〔ト出て來り」平「お常居るか見れば灯りも附けず騒がしい何事じや〔トお常勝藏びつくりして勝藏は一散に逃げ込む」平「眞ッ暗で何事じや身共咄しを聞た上とり留をしてやるからまアく待て〔ト留める此内お常あかりを附る是より平田八兵衛と顔見合して」八「ヲヽ旦那様」平「ヤヽ先日の老人かシテ何故に此宅へ」八「ヘイ實は勝藏と申者に十両のかしがムり升て催促に參つた處てちらへ來て居ると聞跡を追て參り升た〔ト始終の咄しを仕掛るをお常遮て詞を挾む」常「あれは私の兄の勝藏と申者でムり升る」平「ろちにて兄の無い筈じやが」常「エヽあの義理の兄でムり升る」平「イヤ何に致せコリヤ八兵衛ろちが貸せし金子の十両某しゟ返濟致そて差わそぞよ」八「イヤ旦那様から申受ましては」平「ハテ流別の記念の代りよれ常に遣そのじや〔ト八兵衛に金子を渡そ八兵衛是を受け納め立去る是れゟれ常ていろくとせじを並べ居る」平「此度七卿を盜み出さん爲に長州表へ參る某夫故別を告げに參つた〔トお常聞て偖とは甘イと云ふ顔付き八兵衛は花道まで行思案して引返し露路の内へかくれる是ゟお常種々甘言をのまへ涙を流し」常「旦那にお別れ申たら又いつ逢やら分らぬ私しせめて何ありとお紀念を」平「ヲヽ何か取らせ度も旅中の事」常「貴郎鎧櫃は如何遊しましたせめて夫なりと私に」平「鎧櫃とは變つた望」常「私しも元トと武士の娘」平「ムヽ感心ナ奴じやわい」常「ろふして中の金子はお取り被成ましたか」平「ヲヽ金を取つたればころ金爺に返却して遣したのじや」常「左よふてムり升るかト當ての違た顔付き」平「ヲヽお常勝藏とやら申者そちの兄とあれは一應面會致して參り度何んと呼んで來てくれまいか〔トお常甘イと云思入にて」常「かしてまりましたッイ一ト走り行て參り升ふ〔ト立出で舌を出そ走り去る跡へ八兵衛露路口より出て來り前刻立聞し一部始終を平田ヨ語る」平「偖ては彼奴は去る者なりしかイデ五郎が魂の程を見せてくれんト息込む」八「旦那さま大望のある御体ゆへ少しも早く此處を」平「そちは歸るがよい〔ト八兵衛を歸らす此時露路口より勝藏お常出て來り」常「此方の裏をかく八兵衛」勝「生して置ても後の爲」常「ろんなら今から跡追かけ」勝「一

ト走りいつてくるから手前は平田を」常「おやなして酒に醉して置ますよ」勝「うぬ野郎めと八兵衛の跡を追ては入るお常内へは入る」常「旦那様只今歸りました」平「ヲヽお常かシテ勝藏とやられ」常「生憎るすでムりましたが跡よりすぐに參るよふ隣へ斷つて參りました」平「夫は御苦勞であつた」常「旦那さま御酒一トロお上り被成りませぬか」平「偖てと醉して一」常「ヱヽ」平「イヤ醉て待つと致そふ」常「ドレお燗をして參り升ふ「ト奥へは入る」平「兩人重ねて手ざしに「ト刀を拔き居る處へお常出て來り」常「サアお燗が付きました「ト平田倚りして刀を鞘に納める」常「あなたハ刀を」平「武士の魂錆びて居ぬかと調べて居た「ト言紛らし酒を呑む此時下手より與力一人組子四人出て來り門トロを叩く平田きつとなる」常「刀はいつもの床の間へ」平「イヤ夫には及ばぬ「ト刀を引よせ」平「偖はいよ〱「ト杯をつき出し」平「お常酌を「ト覺悟の思入あるが木頭」平「致してくれ」「ト此摸樣宜敷　幕

三ノ幕目

役人替名

一、平田五郎	一増田八兵衛
一職人熊八	一同菊松
一百性十助	一同五助
一女順禮お丸	一養子文三郎
一目明シ勝藏	

伏見大龜谷八兵衛殺しの場

本舞臺大遠見まん中に地藏堂上下とも藪たゝみ電氣仕掛ケの月を切り出し舞臺四方を見せる誂らへ都て宇治郡大龜谷夜の体風の音相方にて幕開らく「ト百性十助五助の兩人大津井村と印たる提燈を持出て來り」十「時に五助モゥ何て有ろうのヲ我が土地同樣の所なれど此地藏堂の所は隨分氣味の惡い處じやが」五「お前にも似合ぬ事また宵の口じやのにそふ恐ろしがつて呉れてはおれが耐らぬ」十「夫でも何んだか出そふだ」五「おれはおまへを便りよ來たのだからしつかりしてくれ」十「そんなら念佛なといふて行くか」五「おれは法華じやによつてお題目じや」十「南無阿彌陀佛」五「南無妙法蓮華經「ト兩人行掛る此時辻堂の中より女順禮お丸出て來り」丸「モシ深草へはどふ參り升る「ト是にて兩人驚き一時にへたる」兩「夫りや出てお化だ助けてくれ」丸「モシ勝手をしらぬ女順禮どふぞ一所に連れていつてくださりませ」兩「何幽靈だヤア南無妙法蓮陀佛〱〱「ト逃げるお丸は所を知らぬ故附廻る是をおかしみの立廻りにて皆上手へ追入る跡本釣鐘を打込み合方に成つて上手より勝藏出て來り」勝「今打ッたのは一言寺の九ッの鐘お常を餌ばにたらし込アノ平田を密告して置た故大

方今頃とお手當に成つて居すゑ夫にしてもあの八兵衛先つき二人りの中を平田ゑ告た様子故鬼にも角にも生かして置けねへアノ八兵衛一ト筋道の藪傳い爰に隱れてそふだ〳〵「ト辻堂の中へ隱れる是を本釣鐘合方に成り八兵衛出て來る」八「ア、夜道は計とらぬもの爰とよふ〳〵北向地藏マア一ぷく呑んで行きませう「ト莨入を出し提燈の火にて莨を呑み乍ら」八「惡るい奴はお常勝藏お氣の毒なは平田の旦那さま然しお通知らせ申ておいたれば氣使いあるまいテヽ內でも養子の文三郞が定めてまつて居るであろドレヤ早く歸り幷ふか「ト言乍ら立上る是を勝藏いきなり八兵衛が肩先を切り付る」八「ヤア人殺し」勝「エヽ喧い哩」八「人殺しやアイト是より立廻り合て両人顏見合して」八「ヤア我りや勝藏ぢナ」勝「チヽサ手前れ近頃仕出したる萬年青の金でぬれてヾ粟ちん〳〵拍子で金が子を産み鼠算用に仕出した身代むざ〳〵他人にやろうより此勝藏がさしづして跡の始末も附てやろうと二タ道かけ殺すのだ人間僅か五十年モウ十年生き延びたら有かてへとおうせうしろ」八「何をうぬらにト是より輕き念佛入りの立廻りと成り八兵衛迄で逃げ行き又平舞臺へ來てトヾ殺さる」勝「年よりの冷水とよせばいゝのゑ手向いざんまい「ト懷中より金財布をとり出し行き掛ける是をばた〳〵早き合方にて向ふより悴文三良出て來る勝藏驚き辻堂の中へ隱れる」文「本にまア今打つたのは八ッの鐘すこしも早うお迎ひにろふじや〳〵「ト行掛け死骸につまづき」文「チヽどなたか御免被下ませ「ト言乍ら透し見て」文「如何に夜中と言乍ら此んな處で寐てムるとは「ト透し見てヤアまア此血汐ヤヽコリヤとゝさん何者が此よふに殺害したのじやエヽおろかつたわいなア今少し早く來たら此んな事もさせまいにア、情けないお姿じやなア併し泣て居る處ではない少しも早う此事を梅五良さん報知らせませう」文「ト死骸を片よせ行掛る此時辻堂より勝藏出て來り刀をもつて文三良も切つて仕舞とする此時上手より平田五良捕り手を切り拔け落足にて出て來り下手より職人熊八兼松出て來り突き當る平田に勝藏は落足にて両方の花道へ出る文三郞は舞臺にて兼松熊八に押へられる足を双方一時の木の頭木頭より賑かなる鳴物にて五郞勝藏の両人両花道へ一散に這入る此仕組敷宜拍子幕

四幕目

役人替名

一 平田五良
一 髮娘お常
一 左官金五良
一 梅五良女房お初
一 同妹お民

一 弟子職人兼松
一 死燒き梅五郎

一 壬生浪士 大勢

竹本連中

深草の里死燒梅五郎内の場

平舞臺眞中に丸物の死燒鋪下手に瀬戸口能處よ床几一脚あり都て深草里死屋裏口の体なる職人熊八内娘お民の袖を採らへ居る此模樣在鄕めいた騷ぎ唄よて幕明く〔ト熊八お民を採らへ種々口説文句あるお民迷惑の折柄職人兼松出て來りお民を手招して呼び去らしめ己れ是に代り床几に掛け居る熊八是を不知頻りに口説立よふ〳〵顔を見れば民不成是に驚き」熊「ヤツリヤ兼松か」兼「熊さんおまへ獨りで何を言て居るのだ」熊「お民さん噺しを去て居るのだ」兼「そのお民さんは何處に居る」他「サア今迄で爰に居たのだが」兼「お前嬢やんを口説たナ」熊「馬鹿を言へ大べら棒めト爭い居る處へ女房お初出て來り」初「熊八さんおまへ民さんを捕らへ何を言て居たのだ〔ト是より種々小言をいわれ熊八恐れ入つて逼入る跡にお初獨りお民が此頃の素振り何んと無く妙ナ事あるは何んとした事と案し居るを兼松傍より口を添へ」兼「お上さんお嬢さんの御樣子であれや惚た男のあるのでムり升る〔ト是より

お民ト先達て東寺にて平田五郎に見初めし事を言ひ然しながら其浪人は名も分らぬと語る兩人心配して居る處へ花道より左官金五郎主人梅五郎と同道にて歸り來り」梅「實にいま〳〵敷野郞だ」ト〔言作ら舞臺へ來り床几に掛る」初「ナヽこちの人兄さんも御一所に」〔ト是より金五郎はお初に向ひ」金「妹マア聞て呉れけふ兄貴と同道で増田の内へ出掛て行き養子文三郎の身の上に付き町内衆や長屋の衆が此梅五郎さんに後見して呉れと頼んだ處へアノ目明シの勝藏が出て來おつて死なれた八兵衛殿とは血の引た此勝藏後見して私しがするとて高あぐら惡口さんまい夫故梅五郎さんも腹にすへかね夫から一ツ喧嘩と成りマア私しら兩人は引取つて來たのじや」〔ト一部始終の物語聞く女房は驚き顔」初「マア〳〵大變ナ事でムりましたナア夫にしても可愛相なは文三郎年も行かぬ若者故惡者勝藏がその爲に難儀な目にも逢いませまいか」〔ト案しる胸は三人が思案の末の金五郎横手ヲ打つて梅五郎にむかい」金「梅さん宜い事があるあの儘に置く時も勝藏夫婦がどの樣ナ事を仕樣も知れないから一ツ文三郎に嫁を持たしたなら彼奴等二人りも手まゝにすまい」〔ト是より三人色々文三郎が嫁の事にて思案する內お初思ひ出してか手を打ち隣りの娘お辭さんどふやら文三郎に氣のある樣子是幸ひとの噺しより相談頼みに一決して」梅「夫じやお初てめへ是から隣へ往つて萬事の斷をして來てくれ」金「私しも是から歸りませう」初「マア宜敷ではありませんか」梅「

何んにも一寸ト一トロ」金「イヤ又此後に預けて置そヽ」初「主しもあの樣に言て居る事故」梅「遠慮は他人じやサア兄貴コレ兼松手前案内して上げろ」金「夫では馳走に成りませう」兼「サアお出被成ませ」〽ト打連れてこそ入りにける跡に女房と夫との傍」初「申主しへ文三良さんの嫁さんも心配であろうけれど又一ツ心配があり升るろへ」梅「トは又なせ」初「サア内のお民さんが此頃の戀病らい」〽ト聞て驚く梅五郎スリヤ又誰れに」初「サアぬしは誰れとも聞かぬけれどお民さんを從へよこす程におまへから聞て上げて下さんせせ」〽ト立去る妻の後ろ影げ見送る折柄娘のお民火打箱を片手にもち何心ろなく出て來り」民「兄さん何そ用かへ言も世間を白齒の娘兄は引とり」梅「是れお民ろちの心中此兄に何んと聞かしてくれまいの」〽ト種々詞を工みにして尋ぬる兄の親切にお民も今は包み兼ツイコウ〳〵と打明けて言もはづかし鵲の橋も渡してやろとは粹ナ兄御のお情と悦ふ妹を追やりつ思案の目先の松の柴ドリヤ一ト竈と梅五良薪に柴を折り添て竈の中へ燒く火さへ消ゆるは不審と又火を附け竈の中へ押し入るヽ松を中ゟ押出すに驚く折柄ざわ〳〵と落をさしつヽ竈ゟあらわれ出る浪人に是れはと訝り二度恟り」梅「モシ何人でムり舛る」〽ト問聲高しと押し留め平田五郎は容を糺し」五「申も面目なき事ながら反對黨の其爲に取り囲まれし其中をよふ〳〵切り拔け落たれど遁るヽ方もあき盛に一夜の宿を炭燒く竈の内を仮り宿めせよかしとの物語り此方も元より勤王の出字より堅き義抜の魂心聞より悅ふ梅五良香り床しく介抱しつヽ我家の内へ伴い入る始終の樣子立聞熊八何が合点き出て來り」熊「詮義嚴しき浪人者平田五良ヱ遠なし」〽ト透り見廻しにつこり笑み」熊「是から壬生浪士へ訴人して褒美の金に」〽ト言掛け自ら口お押へるが木の頭」熊「ム、そふた」〽ト此仕組宜敷返し」

本舞臺二重前側障子附襖下手同じく已前の入りに却て梅五良內奥座敷のもやう道具納ると直に床の上るりヱ成る」上「呑船の魚大なりと雖も水を失ふ時は螻蟻の爲に制せらるヽとて今の平田が身上と余所を憚る忍聲彼の梅五郎は打合点き」梅「先刻れ目に掛りし時勤王黨のれ方とは偖かに見拔た此梅五良炭燒き風情でムり升れど天下の大義は捨らずと常々思て居り升ればお意ろ置なく平田樣」平「たかくまい被下るとか實に有難き身の仕合せ七郷をたに助け出しおば此報恩は必らず致さん」〽ト語るに折柄斯ぞとも白紙押し明け娘れ民何氣なく立出て」民「兄さん爰にムんしたか」〽ト言つヽ座付き平田の顔見るより驚り兄の傍」民「モシ兄さんあなたじや〳〵〳〵」〽ト譯も仔細も岩つヽじ何の他愛も內證の惚た男はあの方と言ふ詞さへ跡や先き恥のしいやら嬉しいやら兄は何とも合点行かず」梅「コレ妹どふした者じやあなたじや〳〵と貴樣獨り合点してシテあなたがどふ被成た」民「エヽ兄の戀志らずサア先刻の約束じやちやつとあなたと夫婦にしてと兄が袂を引くやら突くやら偖ても呑込梅五

郎あまりの奇遇に驚きて呆然として居たりしが平田に向ひコレ〳〵と妹が意中物語ば平田も大義を抱きし身如何せんと思へども主人が義氣の報恩と意に思わん返答も最色深き胥の間へれ民を伴ひなよ〳〵と虎を殺す猛勇ますら男も戀故に暫しぬれにぞ入りにける跡はあるじがホッと息つき」梅「是れて一ッ心配は助かつた者なれど文三郎の嫁の事又一ト苦勞と思案の折柄口と心は裏の木の戸靜かに開けて娘お常はソッと出で來り」常「モシ梅五良さん逢たかつたと色仕掛け腹にまつわる蜘蛛の糸毒ありとしる梅五良」梅「誰かと思へばれ常さん亭主ある身で馬鹿らしい重笑も程があり過ると言口憎しいと斜しめにれ常こわざと恥かしげに」梅「男は無情い者ながら勝藏といふ内緣の亭主ある身でこなさんに惚れさ淺ひ女の常マア一ト聞て下さん初手ハあんな無法とも知らずに結んだ緣なれど今日此頃の有樣でれ愛相盡て今更ょ又こなさんが最としなり一ろあの勝藏を殺してなりと添たいと湯に行升と内を出て爰までしとふて來た私し不便とおもふて下さんせ」梅「ムヽスリヤ夫程までに此の梅五郎を」常「アイ惚いで何んとせうそいなァ」梅「眞實なればれ常さん八兵衛さんを殺した者其名をいふてもらい度」常「エヽ」梅「サァ八兵衛さんを殺したこあの勝藏であろうがなと星しをさしたる一言に此方も去るもの落着て」常「成る程八兵衛さんを殺したもあの勝藏の仕業らしいが仇き敵などゝ事立ては目明かしのあの勝藏此方の身爲も宜くない故一ろ毒を盛つて殺してと言は心に一ト工み毒藥手廻る其上は文三郎に呑まさんとの種と見拔て知らぬかほ」梅「左程までに私しを思ふてくれるれ常さん其毒藥も此私しが」常「整へて下さんすか」梅「其上は私しも又女房れ初を叩き出し」常「勝藏さんと手を切つて」梅「互に變らぬ」常「夫婦でムんアレ嬉しいとすうり付く戀は思案の垣の外樣子立聞く女房れ初兼松注進に飛んで歸へり夫の傍エヽ聞へぬと取り付て涙に正体なかりけり梅五郎こ合点して」梅「コリヤ女房我りや今から去つた出て行けと聞て驚り」初「エヽ去つたとゝ何の事イヤろりや誰を去つたのじやコレ梅五郎どの聞へぬ仕方と泣き付を隔の襖押分けて兄金五郎中へ入り日頃思案の深い兄貴去るには何ぞ譯のある事イヤサ譯は此方知れて居るコレ妹そちは此兄金五郎と一所に歸へれと引立る意と意一物はありとは知れど金五郎言わねが花と立上るれ常は〳〵たと意に笑み折柄職人兼松が走り來て大聲揚げ」兼「中日那さま大變ナ事でムり升る今新徴組の侍が拔身を提げて乱入して爰の内には勤王の浪人にて平田五郎と云者がかくまいあると垣を越し夫〳〵そこへと言口を梅五郎はしばしと制し」梅「私の内にろの樣ナ」兼「イヱ慥さんと奥の間で「トッカ〳〵と行く梅五郎引戻し」梅「エヽよう聞けと」「ト平舞臺へつき落そが木のかしら」梅「出る奴だなァ」「ト此仕組宜敷返し」

本舞臺以前の道具爰に平田五郎拔刀にて壬生浪士と切り結び居る暫〳〵花道まで切拔ける

此時上手家体の障子をあけ」お民「チヽ嬉しや御無事で」五郎「チヽろちも堅固で」ト血刀をふるうのが木のかしら」侍大勢「夫取り逃かし召さるナと花道へ行く此時向より侍大勢出で來り取り囲キツト見得にて拍子幕

幕引付ると五郎立廻り乍ら向へ這入る

五幕目

役人替名

一死燒梅五郎
一目明かし勝藏
一毒婦お常
一梅五郎女房お初
一文三郎言号お艶
一増田文三郎
一合長家權兵衛
一同婆々おむら
一合長家七藏
一合長家留吉
一同米七
一同龜五郎
一同勘右衛門
一同吉左衛門
一同忠助
一左官金五郎
一合長家嬶おべん
一死職人金松
一人形屋藤七
一女房お虎
一仲間角助
一同丸藏
一大和屋喜兵衛
一娘お梅

金貸増田文三郎内の場

本舞臺二幕目増田八兵衛内の道具爰にれ雜巾にて柱敷を拭ふて居る藤七お虎二重に腰を掛け居る此摸樣稽古唄にて幕明く〔ト勝藏角助丸藏出來り〕勝「サア是で呑で歸れト懐中の紙入より二歩金一ツを出し角助に渡を受取て」角「チヤ是は會津樣だぁ」丸「さすが勝藏兄い違た物だ」勝「ろんなにおだてずと早く歸れ」兩人「ろんなら兄貴」勝「飛だ野郎に出逢した」〔ト兩人向へ這入勝藏來り今歸つた」〔ト内へ這入る〕藤「旦那れ歸でムり升か」勝「チヽ藤七さんにれ虎さんか又金の言譯に來たのか其れはいけないよ」藤「左樣でもム升ふが其所がれ慈悲でムり升何卒旦那此末迄れ待被成て被下升せ」〔ト態々旦那倒かしに言勝藏其氣に成り〕勝「そふ出來んと有れば仕方がない此末迄は待と仕樣がお虎さんのは如何ないせ」虎「スリヤ何

故して人のを待て私のを待たんとは勝蔵さん余ではないお前も此間迄一所貧しう暮らして内の親仁に厄介懸けた事もあるじやないかいかなア」勝「サア不斷懇意する中でも金の取引には親子無と言てな只ハイ〳〵と言譯計り聞て居ては家業が出來ぬわい」藤「モシ旦那モウ私はお暇致し升」虎「そんならどふでも出來ぬ金を持て來と言のかへ」勝「しれた事サ」虎「それでは歸んで親仁に言丈言て見升せふ」〔トいゝ乍ら両人捨臺詞にて門口へ出で」それでこそ旦那」勝「よくお出で」虎「アノゑらそふな顔わいなア」〔ト稽古唄に成り橋懸りへ這入る」勝「お靜文三郎を呼べ」靜「アイ〳〵○〔ト門口へ行きモシ文三郎さん」〔ト文三郎橋懸りより氣色の悪敷体にて竹箒塵取りを持出來」文「お靜さん何ぞ用事か」勝「用事が有るから爰へ來い」文「ハイ只今參り升る」〔ト合方に成り文三郎内へ這入二重へ上り」文「何ぞ御用でムり升るか今日は何ふ言ふ譯けか頭痛と寒むけが致し升して」勝「其言譯が氣に食わんおれから今迄門口の掃除に懸つて居るとは役に立たぬ奴だなア」靜「モシ其様に呵つて被下升なモシ病が重つては」勝「病とは何が病」文「イエ病と申程の事でもムり升ぬが何分寒氣と此頭痛がゴホン〳〵〔ト咳をする」靜「其れ見て被下アノ通りでムり升るわいなア」勝「それが人間の辛抱だサア臺所へ往つて割木割つり家根の枯柴を下ろしたりするがいゝ動きさへすれば風引位は拔けて仕舞わい」文「ハイ」勝「エヽ早く行かぬか其具途々するのが氣に障るのだ〔ト煙管を振り上げる此時奥よりお常出で來り勝蔵を留め」常「モシ勝さんお前余まりではないかへ聞いて居れば風邪の文さんを取らへて割木割れの柴下ろせの此子は此家の相談人でこそないかモシモ此子が病氣に成つて死んだなら何ふする積りかお前は乘り取らふと言ふ氣かサアそふで無くば余まり無利矢理な事は言てこそしやんすないなア」勝「何にも無利な事こそ言や仕ない文三郎の爲めを思からだ又うぬは此節何んでも怪しいぞお靜や文三郎のヒイキ計りさらして何でも此頃では外に男でも拵らへ居つたに違へねへ」常「おほらしいそんな私しだと思つてお出か」勝「何でも能いや勝手にさらせ」〔トツイと奥へ這入る」常「コレお靜さんお前は是から奥へ入つて文さんに床を敷いて上げて熱を取てお上げ○そふしてお前も向きでは何れ夫婦に成る中なればやう介抱して汗を取るにこそお前も一所に寐たが好いよ」靜「アレ姉さんとした事が」常「何の耻敷事が有者か」文「其れでは兎も角文三郎さんを」文「勝蔵さんの邪見に引替へ」靜「今日に限つてお常さんの」常「エ」靜「イエそんなら姉さん」文「コホン〳〵アヽ悪い咳だねへ」〔ト二人り奥へ這入ると向ふよりお初出來り舞臺へ來て」初「ハイ御免なさい〔ト内へ這入」常「オヽお初さん何んぞ用事か」初「何んぞ用事がもないものだ人の亭主を寐取つて置いて言わばお前は間男じや」〔ト哩々言ふ奥より勝蔵出來り」勝「誰かと思ばお初さん間男とは何ふしたのだ」初「サ勝蔵さんお前こそ知らぬか内の梅五郎と此お常さんと」勝「そ

んなら間男を」「トお常の顔を見るお常空を吹き」常「ろんな事と知らないよ」「トツイト奥へ
這入跡に勝藏思入あつて」勝「道理で此頃あいつの樣子がおかしい」初「サろんな不埒な二人
り故へ腹癒せに並べて置いて與二に」勝「其れはまア置くと仕樣」初「エヽそんならお前と男
の顔に泥を塗られても」勝「耻を書ふが捨て置くのだ」初「テモマア張合のない」「ト此時下手
より兼松出來り」兼「御免なさい」勝「ヤ門トロに誰やら」「トお初門口明け兼松と顔見合せ
兼「お家さんか」「ト這入り掛けるを」初「アヽ是」「ト突出のが道具替の知らせ兼松うろ〳〵
する勝藏不審の体お初双方へ氣を配る此仕組宜敷稽古歌にて返し
本舞臺二重都て金貸八兵衛住居奥の間の体爰に文三郎木棉布團の上に住居お静脊中を撫で
居る傍に行燈灯し有此模樣合方にて道具納る」文「コレお静さん誠に御機毒でムり升何とお
禮を申て能いやら」静「何の其心配に及び升ふ」文「日〳〵御前に心配懸けるも皆私しに意氣
地が無いから斯ふしてお前も客分には成つて居るものゝ何時夫婦に成る事やら」静「モシ文
三郎さん其御心配には及び升ぬ昨日迄邪見に思ふた姉さんも打て變て今日の深切アノ樣子
デハ姉さんに賴んで祝言をば」「ト此時お常德利と湯呑茶碗を持出來り」常「文さん加減と何
うじやへ」静「おゝ姉さんでムんすか」常「サア文さん一寸藥りをお上り」文「イヤ是れはお常
さん御深切に有難ふ存じ升」「ト懐より藥を出し湯呑に入れ酒をつぎかんざしにてかき廻す
体有て」常「サア一寸お上り」文「じや頂戴致し升ト藥を一息に呑む」文「アヽ苦い〳〵口がち
ぎれる樣じや」常「それ程苦い藥かへ」文「イエ藥は何共ムり升せぬが酒の苦い事と言ふたら
」常「たつたあれ程の酒が苦いかな」常「口がしびれて堪まり升せん」常「そんならモウ」文「エ
」静「本にあのまア苦し想な顔わいなア」文「アイタヽヽヽ」「ト少し毒の廻りし体」文「是れは
何ふしたので有ふアイタヽヽヽ」常「そんならお前アノ腹が」静「姉さん何ふしたんでムんせ
ふ」常「本に是れわれ醫者さんでも呼んで」静「貰ふて下さんせいなア」「ト氣をもむ体文三郎
苦しみトヾ落入るお静悔り成し」静「ヤコリヤ文三郎さんにわ」常「毒の聞き目で」静「エ」常「
イエ何氣の毒な事に成つたねへ」静「文三郎さんいナア」勝「文三郎が升ふしたんだ」「ト勝藏
出で來る」常「何ふ仕たも無いものじやわいなアけふも今日とて寒氣がして頭痛がするもの
を邪見な事計り言ふて其れで此樣に成つたのだサア文三郎さんを生かして返してお呉れエ
ヽ生かしおくれ〳〵」「ト胸倉を取て振り廻して突放す」「エヽ何をしやがる間男さらし目が
」常「サアろの間男をしたのが何ふしたのだ」勝「よくうぬろんな事をぬかしやがるな」「トお
常の頭を叩くとヾ双方捨臺詞にて摑み合ふお静氣をもむ体」静「マア待て下さんせいなア」「
ト此時權兵衛七藏出で來り両人を引別け」權「マア勝藏さん待なさい」七「コリヤマア文さん
は何ふしたのだ」常「其通り急病で文三郎さんは死んだのでムい升」權、七「コリヤ大變じやな

ア」靜「此のまア中で爭は止めなさいナ」勝「それそろふなれど此女の口が憎いから」七「マア／＼宜敷／＼〇そふまて何ぞ用事でもあらば」權「遠慮なく言付て下さい」勝「ろれは御深切に有難ふ何卒宜敷お願い申升」七「宜敷／＼ろれでは私しは花や線香棺桶を買ふて來升ふ」「權」私しは近所からお寺へも知らせて參り升ふ」七「両人り共モウ何モ」両人「言わしやんすなへ」勝「モウ何も言ふ事ではムり升せん」七「ろんなら權兵衛さん」両人「文さんも氣の毒なお事を仕たなア」〔ト両人捨臺詞にて這入る〕靜「文さんが此樣な死樣を成さんせふとハ」勝「夢にも知らぬ今夜の思儀」常「人ハ老少不定と言へど」靜「思へばゐなまい」勝「どれ色屋へ一走り〇〔ト褫を卷くるが道具替りの知らせ尻をからげて往て來ふか」常「モレ文さんなせお前は死で哭れたのだへ」〔ト死骸に取附て泣くお靜も泣落す勝藏は舌を出しし奥へ這入る此摸樣相方にて返し

本舞臺平舞臺一面に忍返し都て金貸八兵衛内裏の体合方時の鐘よて道具納まる

〔ト上手より兼松出來り能き所に立留り〕兼「親方の言付で内々でお常さんに渡たあの藥りとんと合点がゆかぬわいなア」〔ト此時下手よりお梅出來り〕梅「申兼さん」〔ト脊中を叩く〕兼「誰れじや悔りした〇ヲヽお梅さん今頃何所へ行く」梅「わたしやお前に逢に來たのじや〔ト此時お梅親喜平出來り〕兼「ヤお前と父さん」〔ト両人迯懸けるを〕喜「コリヤ二人り共動き居るなよふモおれの金箱に疵を付けたな」兼「何も私しが仕たのではなし」梅「皆私しが惡いから何卒了簡して下さんせ」喜「チヽ其了簡には貴樣を賣つて金ねにするのじや」梅「エヽそんなら私を」兼「賣らして何ふ成り升物か」喜「何 ふも斯ふも有ものか」〔ト兼松を蹴る〕兼「堪らへて居ればしやれた事を仕やあがる」〔ト息込むを〕梅「マア／＼待て下さんせ」〔ト兼松を留る此摸樣宜敷返し

本舞臺平舞臺見附上の方金箪笥帳箪笥の書割都て八兵衛内居間の体爰ヱ屛風を立て棺桶すへ有り前に線香立有り茶碗花立抔有り燈明を灯し前にお村婆々お辯留七米吉龜五郎勘右衛門吉右衛門忠助權兵衛七藏皆々同音に詠歌を諷ふて居る上手にお靜泣伏て居る此摸樣右の詠歌にて道具納る

〔ト皆々詠歌を二三番諷ふ事有て奥より勝藏出來」勝「何方も御苦勞樣でムり升る」皆々「何ら致し升て誠に御力ら落しでムり升ふ」〔ト此時奥よりお常出來り」常「何方もお便立申升て嘸お草臥でムり升ふ何もムり升ぬがあちらへ支度を致し升たゆへ是れ靜お前嘸悲しからふがあちらへ皆さんを連れて行て下さんせ」靜「ハイト泣乍ら言ふ」皆「そんなら何方も」常「御ゆりと召上て下さい升せ」皆々「御遠慮なしに」靜「こちへお越し被下升せ」〔ト合方に成りお靜泣乍先に立皆／＼捨臺詞にて附添奥へ這入る勝藏れ常跡を見送り顔見合せにつたり思

入れ有つて」常「勝さん」勝「れ常味く行たねへ」勝「先邪广者を斯ふして毒害した上で」常「此身代は二人りの物」勝「今度こそは改て」常「世間はれての夫婦と成り」勝「それは金貸の旦那樣常私は連添ふれ家樣」勝「金の威光で」常「榮譽榮花の氣儘暮しに」勝「惚れた同士は面白く」常「世を安樂に暮らせる身に」勝「成つたも運が向いたと言ふもの」常「勝さん實に嬉いねへ」二「ト勝藏の膝に寄り添ふ此時棺桶より文三郎半身を出し」文「モウ言ふ事は其限りか」二「ト両人恂り成し」勝「ヤろふ言我は文三郎」常「魔でも差したか死だ者が」文「其死と見たのは悪事をあばく皆僞り」両人「ヤ」文「そふ物事が味く至ら天道樣は否らぬ物じや」二「ト是を替た合方に成り棺桶より文三郎机を踏臺にして出來る此時上手家体より梅五郎出來り」梅「勝藏お常どふた一本參つたか」二「ト三人梅五郎を見て」勝「ヤ思懸ないそふ言ふ我は」常「死焼の梅五郎「文「兄さん能く來て被下升たお前の言附通り死だと見せて慥に聞た二人りの悪事全く夫に違ム升ぬ」勝、常「そんなら最前呑した毒」梅「アリヤ豆ノ粉で有たのじや〇サァ斯く悪事現れし上は二人り共引縛り其筋へ引渡さんそれ文三郎」文「合点じや〳〵」二「ト此時下手家体より金五郎出來り」金「イヤ文三郎さんヶァ待ねへ」文「おなたゝ金五郎さん」二「ト此時上手家体よりれ初れ靜」靜「モシ文三郎さん嬉敷ふムんすわいなァ」文「誰れかと思へばお初さんにれ靜さん」初「最前からの御樣子はおれで」靜、初「二人りが聞ました」金「わつちが留めたは外か常もねへおやつ二人りは文三郎さんの親の敵」勝、常「エヽ」文「そんなら發父八兵衞さんを大龜谷で殺したも」勝「私しら二人りの仕業と」常「知れた上は」勝「れ常用心しろ」常「勝さんれ前も此場を早く」梅、金「うぬ等逃がしてたまるものか」二「ト勝藏お常逃に懸るを皆〳〵さゝへる此内お常勝藏蠟燭の火を消是を忍び三重に成り是より皆々勝藏れ常を押へ樣とそる探り合に成り此内勝藏は腰の鍵を取出し金箪笥に探り寄り鍵にて箪笥の引出しを明け中より金を出し懐へ入れるれ常は鬘に探り當り是を持勝藏を尋ねる体にて屏風の後ろへ廻り鬘を着て出來此内皆〳〵おかゝみ樣の探合の立廻り宜敷有てドヽお常勝藏探り寄手を引合ふて下手の家体の内のがれ這入梅五郎金五郎お初お靜を捕らへ

「梅、金「〆たぞお常目」初、靜「アレ私じやわいな」二「ト両人恂りして跡へ寄るのが木の頭矢張五人探合の摸樣此仕組宜敷柏子幕

大詰

役人替名

一平田五郎　一女房お常

一茨出し常藏　一死焼梅五郎

實は目明かし勝藏

一梅五郎妹　お民
一職人　熊八
一梅五郎女房　お初
一弟子　兼松
一娘　お靜
一山名佐古市郎
一増田文三郎
一軍兵　惣出

伏見戰爭の場

本舞臺平舞臺一面の松並樹空より松乃釣枝都て鳥羽海道の体大勢の東軍の兵士鉄砲を打居る此摸様ドンチヤンばた〳〵アリヤ〳〵の聲鉄砲の音にて幕明〽ト平田五郎仮花道より兵士を卒ひ舞臺へ來り」平「小隊留まれ」〽ト皆〳〵留まる〽平「如何に方〳〵我小隊今の苦戰に草鞋抔も痛みたれば某是にて取替へん各方の如何でムる」〇「某共は未だ痛み申ねば」皆々一此儘直〳〵よ然らば貴殿某に代り小隊の指揮をれ願申」平「承知仕つた」〽ト平田小隊旗を〇に渡す皆〳〵〇の跡に從い上手へ這入る暫〳〵有て梅五郎文三郎出來り平田と顔見合し」梅「ヤあなたは平田の旦那」平「ヲヽ梅五郎かシテ其れ成るは」梅「八兵衛の養子」文「文三郎目でムり升る」平「積る咄も有なれど猶豫成ぬ戰爭故事納て對面致さん」梅「其れでは最早」両人「是にてれ別でムり升る〇」平「丸に當らぬ様よ致せ」〽ト言捨て上手へ這入」梅「ハア〇早走つてお出成すつた〇又も落武者の來ぬ内に」梅「早く逃げて行升ふか」〽ト両人橋懸りへ走り這入熊八お民を捕へ出來る」熊「モウ斯ふ成つたら逃しは仕ねへ」民「アレ誰れぞ來て下さんせいなア」〽ト上手より兼松出來り」兼「熊さんお前何をするのじや」〽ト行なり突退ける」民「よい處へ其方は兼松」靜「姉さん早う逃げなさんせ」〽トお靜お民の手を取り橋懸りへ這入る」熊「アイタヽヽ」〽ト金玉を握れて痛む体」兼「糞喰らへ」〽ト兼松橋懸りへ這る熊八金玉を押へ氣をもむ体此摸様宜敷早目の相方鉄砲の音にて返し

本舞臺平臺都て淀町家表懸りの体一面に戸を建切り有此摸様ドンチヤン鉄砲の音時の聲にて道具納る

ト兵士大勢敗軍の体各捨臺詞にて上手へ這入る」山名、平田「小隊駈足進め」大勢「エイエイ」〽ト向ふゟ山名佐古市郎小隊旗を持兵士を從へ出來る仮花道ゟ兵士大勢に附添い平田五郎出來り」山平「小隊留れ〇」〽ト是にて山名の手の兵士は舞臺に平田の手の兵士は花道に止まる筒を下げ〇」〽ト皆々一時に筒を下に立てる丸を込め〇」〽ト皆々筒に丸を込めるねらへ〇」〽ト皆々舞臺の上手へ筒口を向ける討て〇」〽ト皆々一時よ打ッ肩へ筒口」〽ト皆々鉄砲を肩へ上る小隊駈足進め」皆々「エイ〳〵」〽ト皆々上手へ這入る是を橋懸りより勝藏挾出しの拵らへにて

出來り」勝「今迄薩長勢の泡ふく樣を見樣と思つた甲斐もねへ今日の負け樣モウ斯う成ちや駄目だから○」「ト舞臺の家を見てチヽ爰は名高い豪家の近江屋だサヅ金も澤山置て有ふどれ分捕と出掛樣か」「ト戸を明け悔りして誰だ〳〵」「ト内よりお常」常「チヽ悔りした誰だへ」「ト顔見合」勝「手前はまお早い奴だナア○ろふして仕事に成たのか」常「そふだ二三百両には成たよそふして此短刀まで用心にさして來たのサ」勝「そふしてモウ金はねへのか」常「金もまだ探したら有るで有ふが着類なり持物なり金目の物れ澤山有かられ前が來たのこ幸だモウ一遍這入て見樣」勝「遁ら無くつて何ふする物か」常「ろきでは勝さん」勝「女房れ常」常「寳の山とこ此事だね」「ト両人戸の内へ這入戸を〆る是をばた〳〵になり橋懸りよりお初走り出來り」初「マアおわい事わいなア兄さんは見失ひ心細て成らぬけれど爰に斯ふ玄て居た時は又どんな恐ろしい事が有ふやら早ふ何所そへ迯げ樣わいな」ト「向ふへ行ふとする是をばた〳〵に成り向ふより梅五郎文三郎走り出で花道にてれ初に行逢い顔を見合せ」初「チヽお前は梅さん文三郎さん」梅「れ初か」文「姉さんゑらい事に成り升たおア」初「よい所で逢い升たなア」梅「マア〳〵こつちへ來い」文「早ふ一所に姉さんお出」初「アイ行わいなア○」「ト舞臺へ來り昨日の朝兄さんの所へ手傳いに往た所今朝よ成つての此騒動兄さんに連れられて出たこ出たなれど涂中で兄さんは見失い」梅「そんならお金五郎とははぐれたのか○じや仕方がねへ」文「早く行て姉さんやお靜さんもさがすと仕樣」「ト行に懸る此時戸の内にて」常「勝造さん强つこのりれ仕よ」勝「おれよりお常手前好ひか」「ト此聲を聞き」梅「何勝藏」文「お常とこ」初「聲は慥にト戸の内より勝藏れ常出來るを三人見て」梅「やう奴は勝藏」初「お常さん」文「養父の敵覺悟さらせ」「ト飛掛るを勝藏突倒し宜敷有てトヽ梅五郎お常をも後ろへ倒し」常「アノ樣何だへ」勝「糞でも食らへ」「ト両人上手へ走り這入る」「ト三人起上り」梅「お奴を迯がして何ふ成ものか」初「跡より追欠」文「とつさんの敵こ討して遣るから早ふ來い」文「合点でム升」初「私しも跡から行わいな」「ト二人上手へ這入る」初「私しも追付きふ不及乍ら」「ト身繕いして上手へ行懸る此時橋懸りよりれ民お靜出來りお初を見て」靜「ろこへ行のは」民「お初さんではムんせぬ」「ト見返り」初「チヽお前はお民さんにお靜さん梅五良さんも文三良さんも今向ふへ勝藏さん夫婦を追欠けて往たに依てちつとも早ふ」民靜「姉さん一所に」「ト三人上手へ走り這入る此摸樣宜敷早日の相方にて返し

本舞臺平舞臺都て淀海道野陣の体爰に長州兵四人鉄砲を持ち立懸り眞中に平田五良軍服大小の拵へにて手を廣ろげ此下手に勝藏お常立懸り居る此摸樣涙の音かすめて合方鉄砲の音にて道具納まる

平「おのれは毒婦常でゝ無いか」甚「あなたは平田の旦那様」勝「何だ平田の旦那○コリヤ大變だ早く來い」ト「トあわてゝ橋懸りへ行ふとするを」梅「うぬを逃がして」五人「よい物かト」梅五郎文三郎お民れ初お静出來る」勝「コリヤ大變だ〳〵」梅「其れにお出被成升るは平田の旦那様ではムり升ぬか」平「ナゝろちは梅五郎夫婦兄弟」民「お夏のしうムり升る」平「其方も無事で悦ばしい○シテ此男は」梅「其こそ八兵衛を殺したる目明かしの勝藏でムり升る」平「何是なるは常の姦夫勝藏と言ふ者か」文「とつさんの敵が討たさ此兄さんの助けにて爰迄追欠て參り升た」平「ムゝ親の敵を討たいといふ文三郎の心庭感心な致した某助太刀致せし上文三郎の望みを遂げさせ遣さん」梅「スリヤ平田の旦那様には」文「私の敵討のお助太刀をば」平「如何にも」皆々「有り難ふ存じ升る」勝「コウお常モウ斯う成つたら破れかぶれ」常「迚も死ぬる命なら一人りでも殺そが徳だからお前も十分れ殺しなさいよ」平「エゝ無益の事を言ふより身支度でも致して置け」両人「洒落た事をする奴だね」平「是文三郎梅五郎其方共にハ刀の用意無き樣子」ト「ト後ろの両人思入有て」○「其刀は某用立申さん」口「それ両人是を遣へ」梅、文「有難ふ存升る」ト「ト両人○□より刀を受取る此内勝藏お常身拵らへする」文「目明し勝藏れ常の両人とつさんの敵覺悟せよ」梅「よくてろ惡法かきやアがつた今こそう主ら思い知れ」勝「モウ斯ふ成つたら仕方がねへ此勝藏の働を冥途の土產に覺へて置け」常「只の女と侮どつてり返討をせぬ樣に文三郎覺悟しろ」文、梅「何を」勝、常「糞」ト「ト四人拔き合せ立合を平田うか〳〵と寄りれ常の短刀を鉄扇にて打落すれ常拾ふとするをグットト當る是にてお常バッタリ倒れる」平「文三郎にも勝藏を切れ」文「ヘイ」ト「ト勝藏に切て懸る一寸立廻り有て一寸見へ是を誂らへの相方に成り始終無茶切の立廻り宜敷有て」ト「トド文三郎勝藏の肩を切る梅五郎始終初太刀を文三郎に讓る体」平「手際で」五人「手際トわ是にて勝藏だぢろぐを梅五脇腹をさし通す是にて勝藏立身に苦みばつたり落入る平」「文三郎留めをさせ」梅「それ止めだ止だ」文「ヘイ○」ト「トまたがりとつさんの敵思知たか」平「ろふして爰にまだ一人り有る」ト「トお常に活を入れる是にてれ常氣が付き邊りを見て」常「ヤ勝藏さんには」文「私しが首尾好ふ討取た」常「そんならお前が切りやがつたか今度はてつちが夫トの敵覺悟しろ」平「ろれ」梅、文「何を」ト「ト又無茶切の立廻り宜敷有てお常始終文三郎を切ふとする梅五郎助けには入る危き立廻り有てドゞお常文三郎を目懸切附樣とする」平「ヤット小柄を手裏劍に打ッ」平「ヤコリヤ手裏劍を」ト「トたぢろぐを文三郎胸を突く是と一時に梅五郎肩へ切附る」平「手際わ」五人「手際で」ト「ト文三郎刀を其儘グットゑぐる是にてお常立身に苦みばつたり落る文三郎留めをさし両人下に居てホットト思入」平「斯く本意を遂げし上は最早此場を歸てよかろふ」梅「思懸無きお情にて」文「首尾よふ討しも平田樣の」静「軍の中にて」皆々「幸先よし」平「ナノ目出たい

〵二〔ト是宜を敷賑ぎやかな鳴物を冠せ目出度　幕

明治廿七年二月廿一日印刷
明治廿七年二月廿七日發行
（定價拾五錢）

版權
興行權所有

著作者　大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷　勝彦兵衞
發行者　大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷　中西貞行
印刷者　大阪市東區内本町橋詰町六十八番屋敷　周撰社　前田菊松